

- ◇能登半島地震により被災された方々へお見舞いを申し上げます 村田 武一郎(NAED 理事長)……1頁
- ◇奈良フェニックス大学「開校 10 周年の集い」を終え、明日に向けて！ 高岡宏芳(地域P&C 第8期生)……2頁
- ◇地域づくりのために、人を理解する映画鑑賞 堀越正夫(地域P&C 第3期生/専務理事・事務局長)……3頁

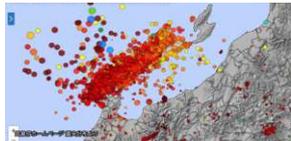
## 能登半島地震により被災された方々へお見舞いを申し上げます

村田 武一郎(NAED 理事長)

皆さま、今年もよろしくお願い致します。

今年、大変な年明けとなりました。能登半島地震により被災された方々の困苦、被災地域の惨状に接し、心からお見舞いを申し上げます。

最大の地震は、1月1日16時10分頃に発生しました。最大震度は7、震源の深さは16km、マグニチュード



能登半島周辺で発生した地震  
2024年1月1日~12日  
(気象庁HP 震央分布よりNHK作成)

は7.6でした。阪神・淡路大震災を引き起こした兵庫県南部地震(1995年1月17日)や熊本地震(2016年4月14日)のマグニチュードが7.3だったので、より大きな地震です。強烈な揺れに加え、地盤の大隆起・沈降・液状化、大規模な崖崩れ、大津波が発生しました。建物の倒壊、道路の崩壊・寸断が多発し、水・電気などのネットワークも破断しました。その後も、広範囲にわたる地震が相次ぎました。

この地震では、木造家屋に大きなダメージを与える周期1~2秒の揺れが強く、多くの建物が倒壊しました。238人の方々が亡くなられました(1月29日現在。関連死を含む。ほかに安否不明19人)が、その2/3は「建物倒壊による圧迫死」とされています。住宅の耐震化が進んでいなかったことも建物倒壊・圧死者が多かった原因のひとつとされていますが、高齢者には耐震補強の費用負担が大きな問題です(阪神・淡路大震災では、耐震化された住宅とそうではない住宅との被害差が顕著でした。傾いても倒壊にまで至らなければ……。神戸では、街路樹にもたれかかってペシャンコを免れた建物が数多く見られました)。亡くなられた方々のご冥福を祈ります。

被害が最も大きかった奥能登地域(輪島市、珠洲市、能登町、穴水町)の人口は約6万人で、高齢化・過疎化が顕著でした。神戸市および阪神地域の人口約330万人、阪神・淡路大震災での死者数と比べると(比べて良いものかどうかわかりませんが……)、能登半島地震の人口あたり死者数は、阪神・淡路大震災の2倍にも達します。産業(漁港・漁業、輪島塗、農業、観光など)への影響も深刻です。

阪神・淡路大震災を経験した石川県出身者としては、どうしても、発災後の支援が気になるところです。

◇発災からの時間経過とともに必要な支援が変わりますが、「公助」(自衛隊、全国の都道府県・市町村、災害関連専門家集団による支援)が機能しているように見受けられます(マスコミは、相変わらず「問題あり」ばかりを報道していますが……)。ただし、支援がいくら適切に行われても、被災された方々のニーズや不安のすべてに答えられないことがもどかしいところです。

◇当初3日間は、「自助」「共助」が重要であることが浮きぼりになったように思います。援助隊は、道路状況等により、簡単には現地へ到着できませんでした。

◇個人ボランティアは、混乱を避けるため、参加登録方式となり、ようやく1月27日に被災地支援に入れるようになりました(阪神・淡路大震災では、当初から、個人ボランティアの方々の大活躍がありました……)。ただし、被害が大きかった輪島市、珠洲市では、ボランティア受入れの目途がたっていません。

被災地の復興が着実に進み、被災された方々の困苦が和らぎ、生き生きとした日々が早く戻ることを祈ります。

## 奈良フェニックス大学「開校 10 周年の集い」を終え、明日に向けて！

高岡宏芳(地域P&C 第8期生)

奈良フェニックス大学「開校 10 周年の集い」が、2023 年 12 月 7 日(木)、DMG MORI やまと郡山城ホールにおいて開催されました。奈良フェニックス大学は、NAED の姉妹団体です。100 名を超える OB・OG、来賓・講師、受講生が見守る中、プログラムが進んでくると、私の隣に座る村田学長の瞳が「開校からの想いが脳裏をよぎり」潤んでいるように見えました。

奈良フェニックス大学は、「盛年(シニア世代)が、それぞれの無尽蔵を活かし、これからのライフスタイルを学び、仲間づくりを行うとともに、地域社会の将来のための活動を行うにあたっての知識やノウハウを提供する」ことを目的として、2013 年 4 月に開校しました。以来、延べ受講者数が 1,400 名を超え、OB・OG、現受講生が『地域社会での豊かな生活を継続するとともに、地域社会を支え、地域社会の持続可能性の拡大のために、その能力を活かすことが求められています。』

教養学部では、地域社会活動の基礎を学ぶとともに、仲間づくりを重視し、そのため、クラブ活動の時間が設けられ、多くのクラブが設立され、受講生同士が繋がる機会がつけられました。開校 2 年目以降は、特別講座(公開講座)、地域リーダーカレッジ(現.地域研究科)、ものづくり科を、講師の方々の協力を得て開設し、受講生の積極的な学びと活動が続いてきました。しかしながら、2020 年からの新型コロナウイルス感染症の拡大は、学部・学科等の再編を余儀なくさせ、現在は、地域研究科、公開教養講座を開講しています。地域研究科では、地域社会の将来に資する活動が継続して積極的に行われています。

ここで、仲間の一人を紹介します。年齢が 86 才の最長老ですが、身体は溘溘と動き、頭は聡明で、他人との会話は相手への思いやりをもって話をよく聴き、受講態度は常に前向きです。地域づくりの基本を体現されておられる「奈良フェニックス大学生の羅針盤」とも言える人で、これからも「ともに歩みたい」と考えています。

私は、この「開校 10 周年の集い」の実行委員長という大役を仰せつかり、実行委員各位の多大なる協力により、式典を開催することができました。奈良フェニックス大学開校 10 周年は、受講生、OB・OG、指導者、支援者の協力の賜物であり、皆さまにお礼を申し上げます。

「継続は力なり」という言葉があるように、奈良フェニックス大学の盛年たちは、これからも、人生 100 年時代を仲間と一緒に歩み、人生を謳歌し、一步ずつ駆け抜けていきます。



学長あいさつ



実行委員長あいさつ



来賓あいさつ  
(上田大和郡山市長)



記念講演  
(田辺征夫先生)



実行委員一同



バイオリン演奏



記念品(絵画)贈呈

## 地域づくりのために、人を理解する映画鑑賞

堀越正夫(地域 P&C 第 3 期生／専務理事・事務局長)

数年前、地域 P&C 養成塾生の方から、「移動映画上映を行うのに、おすすめの映画はありますか？」と聞かれたことがあります。その時は、地域の方が一緒に見て、楽しめる映画ということで、すぐには楽しい映画が思い浮かず、「キューブリックの映画が良いんじゃない」と簡単に言ってしまいました。あまり考えなしの発言で、申しわけなかったです。

その若い塾生は、スタンリー・キューブリック監督を知りませんでした。もちろん、キューブリックの新作が見られるわけではなく、監督作品は、「皆が楽しめる映画」ではないので、私の言葉はアドバイスにもなっていなかったのです。私の経験で、昔、ビデオや配信がない頃、キューブリック監督の「2001 年宇宙の旅」の自主上映(知り合いが輸入プリントを上映)を鑑賞したことがあったというだけでした。

そういうわけで、NAED 通信 No.31(2023 年 2 月 1 日発行)に書いた「地域づくりのために、人を理解する読書」に続いて、地域づくりの参考になる映画について書いてみたいと思います。映画の選択理由は、地域に住んでいる人を理解することが地域づくりの基本、という点です。地域づくりが主題になっている映画ではありません。

### 1. おすすめの映画を 3 本 + $\alpha$

おすすめの映画は、次のとおりです。

- (1)「市民ケーン」 オーズン・ウェルズ監督
- (2)「イニシエリン島の精霊」 マーティン・マクドナー監督
- (3)「月は上りぬ」 田中絹代監督 +  $\alpha$ 「東京物語」 小津安二郎監督

### 2. それぞれの映画が、おすすめの理由は？

映画ごとに、その魅力を伝えたいと思います。映画は、その上映時間は、拘束されます。そのため、引き込まれるようなものが良いのですが、古い映画は、現代とテンポが違うかもしれません。

#### (1)市民ケーン

この映画で描かれるのは、亡くなった新聞王、チャールズ・フォスター・ケーンの生涯です。亡くなる直前に残した「薔薇のつぼみ」という言葉の意味を説き明かしていく映画となっています。映画の登場人物は、その謎を解き明かせないまま、最後の映像で示唆されます。



地域づくりとは、設定などはまったく関係のない映画ですが、地域で出会う人々の背景には、それまでの人生や個人的歴史が多く積み重なっているという点で見ると、人について謎を解いていくのが、地域づくり言えるでしょう。そのことを知る大切さがわかる作品となっています。

ここで登場する新聞王である「市民ケーン」は、専制的な考え、横柄な言葉づかい、独善的な考え方、人をコマのように扱う態度など、人物的には好ましい点の一つもありません。好きになれない人のことを、なぜ知らないといけないのかと言えば、人間社会ではこのような人物が多く、しかも権力や人を支配する力をもっていることもあります。そのような人(市民ケーン)が、このような人になったのはなぜなのでしょう。

地域づくりでは、既におられる先達(すばらしい人が多いと思います)の気持ちを理解するため、この映画のように付き合っていく中で理解していくことが必要となります。この映画は、それを教えてくれているように思います。

## ②イニシェリン島の精霊

2022年の映画ですが、映画の舞台は、1923年のアイルランドの小さな孤島です。インターネットサイトのウィキペディアには、粗筋として、次のように書かれています

「イニシェリン島に暮らすパードリックは、ある日、親友のコルムから突然絶縁を告げられる。長年友情を育んできたはずだった彼が何故突然そんなことを言い出したのか理解できないパードリックは、賢明な妹シボーンや風変わりな隣人ドミニクの力を借りて事態を好転させようとするが、コルムから『これ以上自分に関わると自分の指を切り落とす』と恐ろしい宣言をされてしまう」

このように、映画の導入部は、単なる友人同士の争いです。高齢者のケンカなんて、映画になるのだろうかと考えますが、さらに見ていくとその意外な展開に驚きます。小さな島での事件、自治体として、皆が顔見知りという環境です。

過去の日本では、島国根性という言葉がありました。日本人は、島国根性をもっているのだめだというような形で使われたと記憶しています。

島国根性という言葉は、広辞苑では、「他国との交渉が少ないため、視野がせまく、閉鎖的でこせこせした性質」と書かれています。この映画の登場人物、パードリックの直情的な行動は、この性質を想起させます。また、コルムの友人拒絶からくる行動も、凝り固まった考え方であることを思わせます。

地域づくりの参考となる映画として、この映画では、そこで争いや思い違いが起きた時に、どのように生きていくかが問われている、と簡単に説明したいところですが、この作品では単純な善悪や、日常的な解決、涙を流すだけの状況を描いていません。舞台は、離れ小島であり、小さな社会での考え方、生き方を考えさせる映画だと思えます。

## 3. 月は上りぬ + α 東京物語

3本目は、日本映画「月は上りぬ」です。この映画では、奈良を舞台にした若者の恋愛模様を描いています。公開は、1955年と古い作品です。

女優としても有名な田中絹代が監督をしています。この時代に女性が映画監督をされていたことに驚きます。脚本は小津安二郎がかかわっています。小津安二郎は、その2年前に公開された映画「東京物語」を撮っており、



見終わると、映画「月は上りぬ」は、かなり以前に元の脚本が書かれたものであるのに、「東京物語」との対比で書かれた脚本のように思えます。

舞台設定は、第2次世界大戦で奈良へ疎開したまま住みついた浅井家です。その家の3人の娘が、それぞれの結婚までの騒動を描いています。

娘を嫁がすまでの物語は、小津安二郎が自分の映画で良く使っている設定です。1952年の映画「東京物語」では、経済の中心地「東京」に行った子供を思う両親の気持ちと、その家族を描いていました。

夏目漱石の小説『三四郎』で、「滅びるね」と書かれた東京中心の日本。第2次世界大戦で一度滅びた後の東京に代表される日本が、再度復興していき、バブル崩壊で滅びる前の時代を描いています。

「月は上りぬ」では、東京に対比する場所として、奈良にロケをして、東京へ移動する人々と、地域に残る人を対比しているように見ることができます。奈良に住んでいる者の東京への思いと、東京に戻らず、奈良に留まる父親の思いだと、映画の最後でわかる仕掛けとなっています。

私の印象ですが、父親役の笠智衆に、吐露させる台詞に、脚本家である小津安二郎の気持ちがこもっているように思います。

日本の各地域が、どのように生きていくのか。政治・経済の中心地である東京に対応して、どのように生きるのか。映画は、淡々と人の日常を描いているだけですが、考える機会をくれる作品ではないかと思っています。

注1)「市民ケーン」のポスター画像(パブリック・ドメイン)は、ウィキペディアより引用しています。

注2)「月はのぼりぬ」のスチール写真は、津田なおみ著「映画監督 田中絹代」に掲載されているものを引用しています。写真を引用した著作には、映画監督となった田中絹代が、まだ女性の職業に閉鎖的だった日本映画界での苦勞が綴られていて、興味深く読むことができます。